

身内に頼らず人を大切に。

稲庭うどん『後文』【秋田県・稲庭町】

IMコンサルタント代表 平松陽一



後藤昌男会長(右)と佐々木丑弘社長(左)

高級食材の稲庭うどん

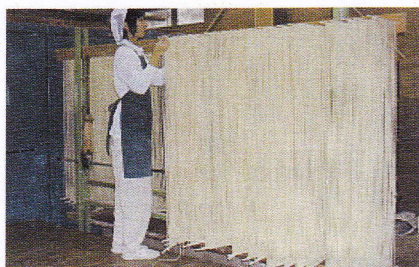
稲庭うどんは秋田の名産と言われているが、秋田で日常食として食べる人は少ない。何故かというと、高級食材なので、主に大都市圏で贈答用として使われることが多い。

古く、江戸時代には参勤交代の時に、幕府への土産品として扱われていたという。

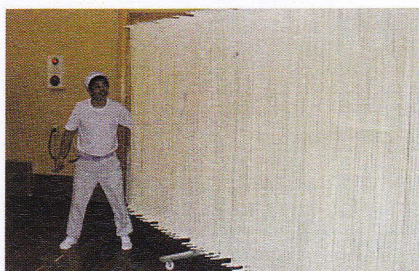
稲庭うどんの歴史は、400年と言われているが、食材として注目を浴びるのは、昭和50年代に入ってからである。その背景には、日本人の健康ブームがある。



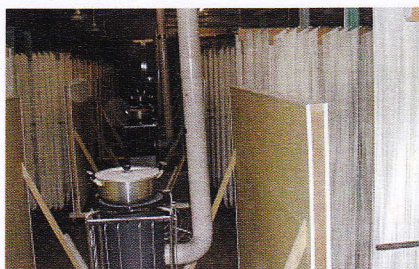
一本一本丁寧に手廻いをする



竿かけ



足止め



乾燥

業種・業態を変え生き残る

後文(株式会社後文 代表取締役社長 佐々木丑弘氏)が、本業として本格的に稲庭うどんに進出するのは昭和48年頃からである。

後文は現社長で5代目となるが、元々明治の初めの頃に、初代が福井を本拠地として、漆を集める仕事のため、秋田を頻繁に訪れているうちに、湯沢に住みついた。以後、大正13年には『炭米穀店』更に『衣料品店』と変わり、そして

ツルツとした食感と、何よりもカロリーが低く、美味しいということから広く知られるようになった。

稲庭うどんを本業とするようになった。

一般に、老舗と言うと一つの業種・業態で行われているものを示すが、業種・業態を変えながら受け継いでいくということでは後文は珍しいケースである。

一つの業種・業態にこだわらなから、やがて衰退していく老舗がある中で、後文は極めて巧妙に変革しているということでは注目される。

会長の後藤昌男氏は、51歳という若さで、2003年に社長職を現社長に譲った。その理由を聞いたところ、「社長の成功体験が会社をおかしくする」と言うのである。

親族に頼らない経営をする

一般に、老舗は、家族・同族経営と年功序列で成り立っているところが多い。ところが、この後文にはそれがない。事実、後文の社員は若い人が多い。後藤会長の実力主義と言う考えに、同感した若い人が、同業他社から入社したいと転職してくることが多いそうだ。

このような考えを後藤会長が持つに至った背景には、会長の母方の祖父の影響がある。

母方の祖父は事業家で、この人が、現会長に「会社の業績を伸ばしたかったら、親類は入れないこと

株式会社 後文

〒012-0107 秋田県湯沢市稲庭町字三嶋72番地
大正13年の創業より昔ながらの手延べ製法で、また
地下100メートルからの湧き水を使用し「稲庭うどん」を
製造、販売している老舗。
TEL.0183-43-2307 FAX.0183-58-3001
URL: <http://gobun.moo.jp>
E-mail: niccolo@yutopia.or.jp



老舗の風格が感じられる本店店舗。



だ」とアドバイスしたそうである。
著者が今まで接した老舗の経営者の多くがよく言うことがある。それは、経営上影響を受けるのは父親ではなく、祖父であるという。ある意味では、父親はライバルなのだ。幼い頃から身近で意見を聞きながら育っているのに、経営上の方針が異なっても従ってしまうことになる。ところが、祖父となると、損得勘定がない意見を教訓としてアドバイスしてくれる。これが、やがて次期経営者の知恵となるのである。

最近の核家族社会を見ていると、老舗の次期経営者が祖父と接することが少なくなっている。これでは、経営上の知恵などが身に付かないのも無理からぬことであるが、後文にはまだそれが残っているのである。

また、後藤会長に自分の後継者として社長の条件を聞いたところ、「考え方が一致していなければならぬ」と言う。それができるのが、現社長ということでバトンタッチをしたそうである。

雪国の真面目な気質が 経営の基盤をつくる

後文の社員について聞いたところ、稲庭うどんを作るのに生きがいを感じる様な人でなければならぬという。一緒に仕事について考えられる人をいかに集めるかということである。

稲庭うどんの製造工程は、分業化ににくい。一般企業の工場の製造工程では、人が動かず物が動くことの多い中で、稲庭うどんの製造工程は、最初から仕上げまで一人で携わる事が多い。

だから、手作業を重要とされる稲庭うどんの生産工程では、コツコツと作業をする地道な人が求められる。そんなところが、雪深い秋田湯沢に育った人柄が適しているのである。

ところが、このような行程においても問題点はある。それは、ベテランの社員が高齢化していくことだ。稲庭うどんは手作りである。これを伝承していくには、どうしてもベテランの技が必要となってくる。速やかにベテラン社員の技を引き継ぐことも重要だ。

自らそうなる 後継者を期待する

次の6代目社長について聞いた。現会長の長男が東京で働いているという。会長自身は、東京で仕事をしている時に先代が病気になるので、急遽会社に戻り、後継者となった。そこで、次の跡取りはできることならば本人の意志で会社に戻ってくれることを期待しているという。そのために、後文では社会勉強の意味も含めて、高校時代から下宿をさせるようにしている

という。どうしても親元に置いては、社会の見方が狭くなり、本人が成長しないということから、思い切つて外に出すということをしている。

いつの日か、後藤会長の長男は湯沢へと戻り、6代目となり、後文を発展させていくことであろう。後文はこれまで良質な稲庭うどんを作るということにこだわってきた。そこには、しつかりしたものを作れば必ず売れるという意識が根底にあるためだ。

現在、みちのく陸奥の小京都と言われる角館で稲庭うどんの直営店の出店計画中である。雪が溶け、5月の連休の桜の咲く頃には、角館で稲庭うどんの専門店が繁盛しているであろう。

一度皆さんも訪れてみてはいかがでしょうか。▼

ひらまつ よういち 玉川大学工学部経営工学科卒業後、経営コンサルティング活動(会社経営研究所)を経て、I-Mコンサルティング代表となる。現在、経営コンサルティングとして、指導業務、教育、講演を行っている。コンサルティング活動の傍ら、企業に入り管理職を兼務。主な著書「この老舗に学べ(フォレスト出版)」、「必ず売れる営業マンになれる『営業幹部のための指導力増強講座』(以上すばる舎)など多数。